

阿里山麓のツオウ族の村を訪ねて（下）

中村 ふじゑ

〔政治大学入学——武義徳さんの半生②〕

戦争が終わって村へ帰り、農業をしていたが、村長をやらされた。

村のあたりには平地人も住んでいて、ツオウ族とのあいだで土地争いのようなことがあった。そんな関係で、平地人に密告されたらしい。1951年、会議があると県政府に呼びだされ、行ってみたら捕まった。

台北の警備司令部に送られた。そこでは殴られたりはしなかったが、眠らせないで疲労させられた。二年ぐらいいて、弁護士もつけられずに軍事裁判を受けさせられ、判決が出た。判決文には「蓬萊民族解放委員会」に関係したと書いてあった。大陸の共産党と何か関係があるとされた。実際には何も関係ないし、あるはずがなかった。起訴された七名の原住民のうち、武さんだけが無期懲役になり、あとの六名は死刑だった。四名がツオウ族で、二名は角板山のタイヤル族の林瑞昌（日本名・日野三郎）と、高沢照（日本名・大沢照）だった。台湾人全体では、何人殺されたかわからない。万を超えるかもしれないという。

その後、新店の監獄に移された。ここは政治犯の監獄ではなく、軍事監獄だった。二棟の獄舎には、228事件に関係のある者、共産党に関係のある者、または関係のないのにデッチあげられた者がぶちこまれていた。食べ物はそんなに悪くはなかったが、小さな部屋に三十名ぐらいつめこまれ、寝るときは板の床の上に、オイルサージンの缶詰よろしく、足と頭を交互にして、身動きできないくらいびっしりと並んで寝た。

1961年に火焼島（緑島）に移された。新生訓練所という美しい名前のついたところだったが、反

乱罪という罪をかぶせられた人たちがぶちこまれていて、多いときは千五、六百人、島の住民と同じぐらいの数になった。年のいった人は七十歳ぐらいいて、若い人は二十歳ぐらいの学生もいた。

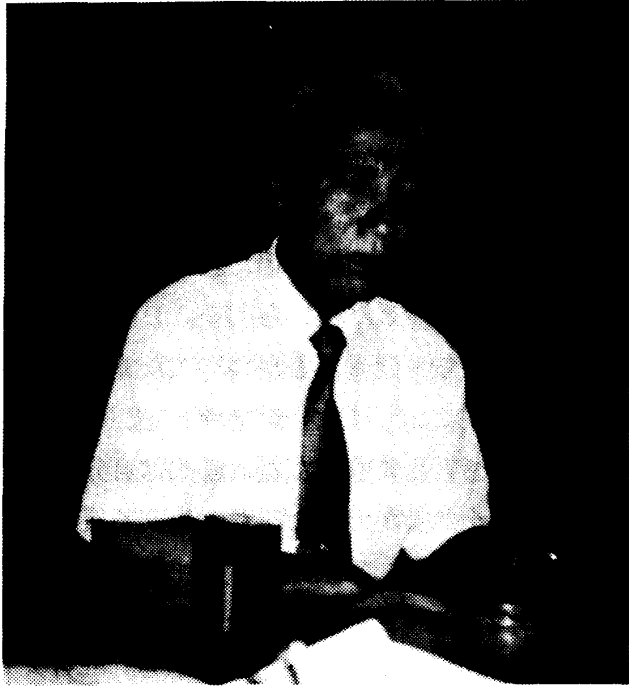
ここでやらされることは思想訓練というもので、一週間に四日、学習会があった。その内容は、軍人の教官が三民主義の講義をするのを聞いたり、討論会をしたりするというものだった。討論会は「国民討論会」といって、各自が意見を発表した。もちろん良心に反しても、自分の本当の意見はいえなかった。

どうせ無期懲役で出られないのだからと、希望もなく、適当に毎日を過ごしていた。ここには、刑期が三年とか五年とか短い人はいなくて、無期を含め、十年以上の者ばかりだった。

1961年に入ってから73年に出るまでのあいだに、台東の泰源監獄に移されたことがあった。泰源の監獄で暴動が起きて、また火焼島に戻った。暴動が起きたのは、アメリカが台湾を見限って中国を承認した年で、台湾独立派がヤケになって起こしたものだ。

舞い戻ってきた火焼島の監獄で、一部屋二十人の暮らしがはじまった。二十人のなかには裏切者や国民党のスパイが入っているから、話をするにも用心が必要だった。ほかの部屋の人とも格子越しに話はできたが、やはりスパイや裏切者がいないか気をつけた。大丈夫だと思ってから、はじめて話ができた。

最初のうちはやけになって、喧嘩ばかりしていたが、一部の裏切者以外は同じ立場の者ばかりだったから、影響されて本を読むようになった。日本の『科学朝日』を翻訳したり、原住民の生活習慣



武義徳さん

について書いて、『中央日報』の副刊にのせてもらったりして、原稿料を稼ぎ、牢屋のなかでの小遣い金を間に合わせた。

そのうち、どうせ監獄へ入ったからには、世界の情勢などを勉強しようと思った。あの時代は二つの勢力が激しく争っていた時代だった。反乱罪で捕らえられた政治犯としては、資本家と無産階級の区別ぐらいは知っておきたかった。「監獄は政治大学だった」と、武さんはいう。

監獄のなかには、もののわかる者がいた。大学教授とか、大陸からきた遊撃隊長とかだ。遊撃隊長は国民党の遊撃隊長だったが、共産党側の思想とか戦術についての知識をもっていた。

生まれてから共産黨員など見たこともなかったけれど、監獄のなかにはいたらしい。自分が共産黨員だと名乗る者はいなかったが、歴史の解釈などが違う人がいた。資本主義の最後の手段は帝国主義だという。そんな話を聞くと、その人が左傾の人だな、ということがわかった。

釈放は、蔣介石の死によってもたらされた。

監獄のなかでは、蔣介石の死は秘密にされていた。しかし中にいた高級官吏が泣いていたり、テ

レビで閲兵などの場面に蔣介石が出てこなくなりして、さては死んだナという噂がひろまった。そのうち炊事係など、獄房の外で仕事をする人たちによって、蔣介石の死が確実であることが明らかになった。

蔣介石が死んで、息子の蔣経国が大芝居をうって、政治犯を300人釈放した。元来殺されるべき者は出さないという法律の規定によって、死刑の判決を受けている者は出さなかった。無期懲役の武さんは釈放されることになった。

釈放された300人のうち、バス一台分、約60人は精神病で、そのまま玉里の病院へ送られた。監獄のなかでは、精神病になる人が多かった。特に学歴の高い人は精神的に弱く、投獄されたことが相当な打撃となった。しかし、社会の発展は我等に有利だと分析している者は、精神病にはならなかった。

村へ帰ってから、武さんたちが逮捕されたとき、ほかの人たちが銃殺されたときに、村に軍隊が派遣されたということを知った。さらに、武さんといっしょに村の仕事をしていた人たちも、監視されたり、真夜中に引っぱられて、いろいろ聞かれたりした人もいたという。

師範学校を出て教員をしていた武さんの弟も、兄との関連で逮捕された。調査期間だけで三年もかけられ、そのあと台北の板橋で思想訓練を受け、七年か八年で帰ってきた。最後は無罪となったから、もとの学校の教員にもどれたが、一生涯、平教員だった。逮捕され、銃殺された高一成の子供たちも、大部分は大学を出ているが、いい職にはつかなかった。監視は「三代まで」つづき、いくら成績がよくても、公務員にはなれなかった。

火焼島から村へ帰ってからは、派出所の警察が眼鏡をかけて、武さんを見張っていた。武さんは毎月、報告書を書かせられた。シッポを掴まれないうまく切り抜けるために、毎日、犬をつれてイノシシを追いかけた。こうしておけば、報告

書を書くときに簡単だった。「〇月〇日、犬をつれてイノシシ狩りに行く」と、これの繰り返し。ある程度たって、注意しても何もないと諦めたようだ。

「いろいろあって、昔は外省人を恨んだが、今は社会制度の問題だったと思う」と、武さんはいう。

〔ふたたび呉鳳廟について〕

武義徳さんの話の途中で、わたしたちは石棹の食堂からラウヤの武さんの家へ移動した。温牧師が、嘉義へ帰る前に、わたしたちを運んでくれた。武さんの家に着いたとたん雨が降りだし、その雨はしだいに激しくなって、雷まで鳴りだした。

しばらくたって、雨のなかを奥さんが畑仕事から帰ってきた。

武さんが逮捕されたとき、五歳の女の子をかしらに、三歳の男の子、一歳の女の子、そしてお腹の中にもう一人子供がいた。四人の子供を抱えて、奥さんは夫の留守を守ったのだ。「二十何年も逃げださなかった」と、武さん。

台北に囚われていたときには、奥さんも面会に行かれたけれど、火燒島（緑島）までは行けなかった。あそこまで行くには、時間も、お金もかかるから、とても貧乏人は行かない。

兵役で台東に來ているとあって、長男が火燒島まで会いに来たことがあった。逮捕されたとき三歳だった子供が、すっかり大きくなっていた。監獄の中では時間のたつのが感じられなかったのに、息子の成長で歳月の長さに気がついた。

その息子さんが、去年の五月、交通事故でなくなった。まだ四十代だった。嘉義にいる息子に会いにく途中の事故だった。「大きな身体してからが…」と、武さんはつぶやいた。その前の年に、その息子の妻が亡くなっていた。残された孫四人。うち二人は都会の学校にいて、二人は武さんといっ

しょに暮らしている。

ラウヤは人口400人ぐらい、農家が主である。お茶の畑も広がっていて、「将来はどうなるかわからないけど、今は収入がいい」と武さんはいう。武さんは、お茶のほかにワサビも植えている。できたワサビは日本への輸出用だ。

「日本ではワサビは高いらしい。日本に行ったら、ワサビがちょびっとしかついてなくて、物足りなかった。ここでは大きいワサビを、一人で一本ぐらい食べてしまう。だが、輸出は自分ではできない。ぼくたちが作ったワサビを安く買い取って、ちょっと整理して大儲けする中間搾取者がいて、そのつぎに、さらに大きな寄生虫がいて、日本には高く売られていく。少数民族は抑圧される」と、武さんはいう。村の外に働きにでる人も、竹崎の郷公所や病院で働けばいいほうで、たいがいは船乗りとか、車の修理見習いとか、いい職にはついていない。

武さんに呉鳳のことを聞いてみた。

「むかし、ツオウ族が平地にいたときは、首狩りをやらなかった。大陸から渡ってきた漢民族によって山に追われると、狩猟で暮らしをたてることになり、よその部落の人たちとの獵場争いから、首狩りがはじまった。

平地の人は勇敢ではないからと、その頭は価値がないとされて、首を取ることはしなかった。もっぱら原住民どうして首を取りあっていた。

だが、呉鳳を殺したのはまちがいない。呉鳳のことは、今の解釈をすれば、統治者と被統治者の関係だ。ツオウ族のなかに入ってきた漢族は、ツオウ族から鹿茸など、自分たちの欲しいものを安く買い叩いたり、ツオウ族にはツオウ族の頭目がいるのに、自分が統治者であるかのようにふるまっていた。

そこでサビキという村のトスクという人が仇討ちにいき、ヤリで呉鳳をうち殺したということだ。

トスクの子孫は、日本時代には鳥宿という姓になり、今は杜という姓になっている。

日本時代に、年に一度、呉鳳廟のお祭があって、ツオウ族の人たちをよんで拝ませた。これは親父のころのことで、ぼくの時代には、そういうことはなくなっていた。親父のころは、ブタを殺して御馳走され、酒をのまされて帰ってきた。そのころの人には、呉鳳廟の政治的な背景はわからない。

国民党の時代になって、山に來た官吏は、この話を信じたい。この辺の地名を呉鳳郷にした。最近、若い人たちが、これはけしからんと運動して、呉鳳郷を阿里山郷に変えた。駅前の呉鳳の銅像も、叩いてかたわにした」

呉鳳を殺害したのがサビキ社のトスクであるという点では、雑誌『蕃界』の文章と武さんの話とは一致する。恨みからの殺害であったことも同じである。しかし、首狩りの風習がなくなった原因は、『蕃界』説が「祟りを恐れて」なのになんか、武さんの説は「取るほどの価値がなかったから」なのである。どちらが事実だったのであろうか？

台湾原住民族のあいだの一時代前のシャーマニズムを考えると、「祟り説」も捨てがたい。日本の統治時代になってからの記録にも、ある部落に死者が出て、その家族がだれかの祟りだと信じて仇討ちに行こうとするのを、警察が必死に止めた、というような話が、たびたびみられるのだ。

わたし自身、今度の旅で、こんな経験をした

1974年、モロタイ島のジャングルのなかで発見されたアミ族の元日本兵・スニヨン（日本名・中村輝夫、中国名・李光輝）さんの奥さんを、台東に訪ねたときのことである。日本兵として南方へいったっきり、三十年も音沙汰がなかった夫を戦死したと諦め、奥さんは別の男と再婚した。当時のマスコミは、幼い子供を抱えて生活に困っていたときに、手をさしのべてくれた二番目の夫と、三十年ぶりで現れた最初の夫のはざまに揺れる妻

の心を伝えていた。「二番目の夫には感謝している」という、妻の談話ものっていた。

しかし、二人の夫のことを聞いたとき、奥さんは、突然、二番目の夫は悪い奴だったと、怒りだしたのだ。「あいつは悪い奴だ。亭主は、あいつに殺された！」と。

夫は、三十年もジャングルのなかで不自由な暮らしをしていたのに、台湾に帰ってきて四年目に死んでしまった。これは、二番目の夫に呪い殺されたのだ。二番目の夫が亭主に贈った首飾りが、身体をむしばんでいった。亭主が死んでから、すぐにあいつも死んだ。いっしょに死ぬ気でやったのだらうと、真顔でいう。

ほかの原住民の人たちにこの話をすると、だれもが、そんなことは迷信だと一笑し、きれいな空気のなかで、自然の食べ物を食べていたのが、急に汚染された空気のなかに入って、酒を飲み、タバコを吸ったりしたもんだから、ガンに罹って死んでしまったのだという。しかし、今では迷信とみなされていることも250年もむかしには、当り前に通用していたのではないだろうか。

〔ララウヤから達邦へ〕

雨はなかなかやまない。ちょっと小降りになったところ、若い伝道師が車で迎えにきてくれて、達邦（タッパン）へ向かった。道は山の斜面を切り開いてつくってある。いましがたの豪雨のせいか、上の方から水が滝のように落ちてきて、道を横切って谷に下っているところもある。景色は最高だった。

達邦に着いたときには雨はあがっていた。達邦は阿里山郷の郷公所所在地で、国民学校や衛生所（診療所）もある。嘉義からの公路バスの終点でもあった。伝道師の青年は、わたしたちを宿に案内してくれた。ホテルというのか、山小屋というのか、各部屋へは外から直接出入りできるようになっていて、バストイレ付き。ツイソルームで一

人、日本円で約三千円である。観光客も来るとは思えないのに、どういう人を対象にした宿泊施設なのだろう。

聞けば、平地の商人たちが、山のお茶などを買いつけに来るときに泊まっていくのだという。ということは、武義徳さんのいう「中間搾取をして、無産階級の血を吸う吸血鬼」が泊まる宿ということであろうか。涼しい高原の農産物は、亜熱帯の台湾では貴重なものとなっている。

宿の近くの食堂で夕食をすませると、すっかり暗くなっていた。懐中電灯を借りて、方金鈴さんの家を訪ねることにした。

方金鈴さんは、銃殺されたツオウ族の四人の「政治犯」の一人、方義仲の奥さんだった。四人のうち、高一成、湯守仁、汪清山の三人の妻たちが、夫が銃殺されたあと、いずれも子供を抱えながら再婚せずに通したのにたいし、ひとり方義仲の妻だけが再婚していた。「彼女は、まだ若かったから」と、人はいう。今の夫と暮らしている家に、前の夫のことを聞きにいくのは、ちょっと気がひけた。

通りがかりの女の人が、「方さんの家へ行くのなら、わたしについていらっしゃい」といって、連れていってくれた。宿のすぐ近くだった。来意を告げると、夫婦で部屋に招き入れてくれたが、夫の方は晩酌の酔いがかかなりまわっていて、聞きとりづらい中国語で、わめくように絶えずしゃべりつづけている。

金鈴さんは、夫の声にかき消されそうな小さい声で、涙ぐみながら語った。

「戦争が終わったあと、おじさんの世話で、あの人と結婚した。あの人は、日本時代に士官学校を出て、戦争に行った。グァム島で遊撃戦をやっていたというけれど、負け戦さだもんだから、戦争のことはあまり話さなかった。

あの日のことは、なにがなんだかさっぱりわからない。

あのころ、私たちの家はここではなく、ここから歩いて三十分ぐらい離れたところだった。主人は郷公所に勤めていた。家で休んでいたら、だれかが来て、郷公所に戻れといった。連れていかれて、そのまま帰ってこなかった。それが最後。どこへ行ったかも教えてくれなかった。手紙がくるでもなく、なにもわからなかった。

銃殺されてから遺体も見せてくれず、遺骨だけ渡された。

ひとりで幼い子供二人と、主人の両親と、七才になる主人の弟の生活をみなければならなくなかった。両親は身体が弱く、病気ばかりしていた。仕事をしながら病院へ行ったり、子供の面倒みたり、大変だった。主人が銃殺されてから、両親は、後を追うように相ついで死んでしまった」

金鈴さんは、大声でしゃべりつづける今の夫をさして、「この人が、あのとき七才だった主人の弟」という。

「わたしより十二歳年下。主人が死んでから十四年たって結婚した。子供が大きくなって学校へあがるとき、わたしも、この人も、いっしょに入学して勉強した」

「我是国民党…」かたわらの夫の言葉に、思わず「えっ、コクミントウ？」と、問い返した。

「この人は、兄さんは日本の兵隊だったけど、自分は国民党の兵隊だったと、こういっているのですよ。二十歳で徴兵されて、一年八カ月の兵役を終えて帰ってきてから、結婚しました」。

再婚してから三人の子供ができ、みな高校まで行かせた。その子供たちも、今ではみな大きくなって所帯をもっている。金鈴さんは、壁にかかっていた額入りの写真を示した。孫の結婚式に集まった一家の写真だという。七人の息子や娘と、そのつれあいと子供たち。大家族であった。

「最初の夫は、とても優しい人だった。夫の写真はあるけれど、見れば思い出して辛くなる」。金鈴さんは、こういって涙ぐんだ。

〔達邦からトファへ〕

7月16日、朝、五時過ぎに目が覚めた。しばらくすると隣のベッドで友人の動く気配がした。

「行く？」

「行こう！」

高砂義勇隊帰りの湯川コウジさんという人がトファにいと聞いて、昨晚、電話をした。本人は留守で、家族の人が、教会の活動で帰りは夜遅くなり、朝は六時半に家を出ると教えてくれた。今から行けば会えるかもしれないと、五時半に宿を出て歩きだした。昨夜訪ねた方さんの家を望むと、金鈴さんの働いている姿が見えた。

達邦を出て下手を望むと、吊り橋が見える。トファへは、あの吊り橋を渡っていくのかと思ひながら近づいていくと、その吊り橋は朽ちかけていて、道は車も通行可能なコンクリートの橋についでいた。

橋を渡ったあとは、登り坂の道がつづく。トファまでは歩いて三十分、いや、あんたたちだったら四十分かな、と達邦でいわれたのだが、はたして四十分で行き着くだろうか。道は見た目には急な坂ではないけれど、歩くとかなりきつい。山の朝は涼しいのに、汗は流れ、息は苦しくなってくる。

やっとたどりついた村のはずれの家に飛びこんで道を尋ねると、親切にもトラックで送ってくれるという。うれしかった。地獄で仏に会った心地だった。

トラックはトファの村をしばらく走って停まった。すぐ側に人が数人乗りこんで、今にも出発しようとしているトラックが一台。わたしたちを送ってくれた人が、そのトラックに駆け寄って呼びとめてくれて、湯川コウジさんとの対面が実現した。

トラックは、山のワサビ畑へ向かうところだった。阿里山の気候ときれいな水が、ワサビの栽培に適しているようで、ワサビはツオウ族の村々の主要な産物となっている。採れたワサビは、すべ

て日本への輸出にまわされる。

湯川コウジ（中国名・湯保福）さんは、高砂義勇隊でニューギニアに行ったものの、迎えにくる船もなく、戦争が終わるまでニューギニアにることになった。食料もなくなり、野性のパパイヤ、バナナがあればいいほうで、木の葉でもなんでも食べた。パパイヤは実ばかりか木も食べたし、バナナは幹の芯も食べた。野性の動物も捕って食べた。ともかく、あるものを手当たりしだいに食べたから、腹をこわして死ぬ人が多かった。死ぬのはみんな日本人で、高砂義勇隊で行ったものは何を食べても腹をこわさなかった。「それだけ山のものはもうかった」という。

激しい爆撃といっしょに宣伝ビラが落ちてきた。「死にたくなければ、教会のなかへ入りなさい」と書いてあった。「だまされるな」と、日本人はいった。ビラの文句を信じて教会へ入ったら、きつと爆撃をうけて死ぬだろうと。戦争が終わってから、教会を見にいった。教会は爆撃もされずに残っていて、はじめてビラの文句が本当だったことを知った。教会というところは椅子と机がたくさんあって、学校みたいなところなのかと思った。

故郷に帰ったら、村に教会ができていた。すぐに教会へ行って、神様の話を聞いて、洗礼を受けた……

湯川コウジさんの話を、もっと聞いていたかったが、トラックの上で待っている人たちのことが気が気ではない。同じトファに住む弟さんを紹介していただいて、湯川コウジさんと別れた。

湯川コウジさんの家とその弟の湯保富さんの家は、道より低くなった土地に、隣りあって建っていた。湯保富さんの家は谷の際にあって、家の前の空き地からは、谷をへだてた向かいの緑の山肌が、目の前にせまって見える。

湯川コウジさんも、湯保富さんも、日本を出るときから取材の対象として、リストにあげていた。

しかし、この二人が兄弟であることを知ったのは、つい、昨晚のことだった。湯保富さんに聞いたかったのは、彼自身にふりかかった悲しい事件に関してだった。

1986年1月、台北のクリーニング屋の夫婦と娘が、店員に殺されるという、台湾中を震撼させた殺人事件が発生した。そして、その加害者が湯保富さんの次男・湯英伸だった。

高校休学中の十八歳の少年は夢をみた——台北へ出て、働きながら英語を勉強しよう。しかし、台北で少年を待ち受けていたのは、底無しの落とし穴だった。新聞から切り抜いた好条件の求人広告の主は、悪質な職業紹介所で、少年に高額な紹介料を要求して、クリーニング屋に送りこんだ。紹介料は、少年には全部は払いきれず、クリーニング屋の主人が、給料から差し引くということで、残りを払った。

仕事は、朝から晩までつづいた。働きながら勉強するという夢は実現しそうもなく、毎日がいたずらに過ぎていく。こんなことでいいのだろうか……

少年は故郷を思った。帰りたい！ 仕事について九日目に、少年は店を辞めたいと店主に申し立てた。日給500円だから、立て替えてもらった紹介料を返しても、交通費ぐらいいは充分残るはずだった。しかし、主人は、食費、宿泊費を差し引いたら、まだ借金が残っているといい、辞めさせようとはせず、取り上げた身分証明書も返してくれない。

さらに辞めたいという少年に、主人はゲンコツと、「蕃人」という言葉をあびせた。「蕃人」という差別用語に、少年は激怒した。つかみあいの格闘となり、少年は理性を失い、いつのまにか三人を殺していた。

「凶悪な殺人事件」は、じつは台湾の社会が原住民の少年にたいして、いかに「凶悪」であるか

を語っていた。「殺人事件」のもつ意味は、多くの人々を動かし、少年を死刑から救う運動も盛り上がったが、力およばず、少年は死刑の宣告を受け、この世から姿を消した。

少年の父親は達邦の郷公所に勤めている。

「わたしたちは、達邦の郷公所のとなりの宿に泊まっています。宿に、あと二人友人を残してきましたので、今日、郷公所のお昼休みにでも、達邦でお話を伺いたいのですが……」

「今日は山へ行くので、郷公所へは行きません」

どうせ湯保富さんは、郷公所へ来られるのだから、達邦で話が聞けるなどと、昨日話し合っていたので、思わず友人と顔を見合わせてしまった。そのまま応接間に迎えられた。

湯保富さんは、お兄さんの湯保福さんとは、ずいぶん年が離れているように見えた。

「いま五二歳です。九人兄弟で、あの兄とは二十いくつかわちがいます。日本時代が終わったとき、ぼくは幼稚園にいていましたが、兄は高砂義勇隊へ行きました。そして、戦後228のとき、高山部隊に入って嘉義までいき、飛行場を襲撃しました」

わたしたちは息子さんのことはなかなか切り出せず、ほかのことばかり聞いていた。

——阿里山郷には、達邦、トフヤ、ララウヤ、リカ、サビキ、シンビ、タータン、その他の村がある。トフヤは戸数約八十、人口約八百。子供たちは達邦の国民学校へ通っている。中学は阿里山に初級中学があるが、生活のいい家庭の子は嘉義の中学へ行っている。阿里山の中学より、嘉義の中学へ行く子のほうが多い。いまでは、子供たちの半分以上が大学や専門学校へ進んでいる。女の子は師範学校や看護婦学校へ進む子が多い。

——結婚は、昔は早くしたが、今では大学などに行ったりすると、二三、四歳になる。生活が変わって、結婚相手もツォウ族どうしとは限らなく



◀ 湯英伸の両親

なった。だが、トフヤでは、今もツオウ族が多い。半分ぐらいは村の人どうしで結婚する。

——中国の教育は、ツオウの言葉を使うことを禁止していたので、ここ十年来、子供たちはツオウの言葉を忘れかけている。ツオウ族の文化を、もう一度みなおす必要がある。家庭では、子供たちに自分たちの言葉で話すようにしている。学校でも週二時間、ツオウの言葉を教えるようになった。このようにしないと、あと十年もたったら、ツオウの言葉は滅びてしまう。

——今年の二月に、村にクバを造った。クバは昔あったツオウ族の集会所で、昔のものと同じように造った。国民学校五、六年のときにはクバで寝たりした。家で晩飯を終えてから、クバに行って友達と遊んで、そのままそこに寝る。クバに集まるのは男だけで、女は行かない。

——女の子の教育は、ヤダウユガナ家（高家）が担当する。踊りとか、歌とか、ツオウ族の文化を女の子に指導する。

村には特別な役割をもつ家があり、例えば汪家は昔からの頭目の家で、今でも、年に一度の祭りのときには、三日間だけ頭目の権利が与えられる。湯家は戦争のときの隊長の役割をうけもつ。そのほか石家はなに、武家はなにの役割と、定まって

いる。

奥さんが杖をついた姿で、応接間に入ってきた。息子が事件を起こす少し前に、オートバイ事故で足を怪我したのだ。達邦の衛生所に勤めている奥さんは、出勤時間がせまっていた。基隆の警察に勤めている長男が、休暇で戻っていて、母親といっしょにわたしたちを、車で達邦まで送ろうとしていた。けれども奥さんは、ちっともせきたてるそぶりも見せず、話に加わった。

なんと、奥さんは銃殺された山中猛吾の娘であった。

「父が逮捕されたとき、わたしはまだ十歳。母は、とても苦しいって泣いていた。父は嘉義警察の山地室の主任をしていました。厳しいけれど、やさしい父でした。逮捕されてから、面会はできなかったけれど、手紙はきました。父は絵がうまくて、クリスマスのときに自分で描いた絵を、わたしに送ってくれました」

奥さんの話に触発されたように、湯保富さんも、「ぼくのおじさんも逮捕された」と、いいだした。湯さんは、湯守仁（日本名・湯川一丸）の甥だったのだ。

「あのころ、ぼくの家では三カ月一回、300

字の文章を書かされて、治安機関に提出していた。兄さんが228事件のとき、嘉義で武器を奪って、飛行場を襲撃したし、おじさんはそのときの部隊長だったから、そうなのだろう。新聞を読んで、意見を300字書く。そんなことがぼくの姉が結婚するまでつづいた。姉の夫は位のある軍人だった。姉が結婚してからは、だいぶよかった。

ツォウ族のなかでも、優秀な人たちはばかりが捕らえられた。蔣介石は阿里山の別荘へくると、高一成と湯守仁に電話をかけてくるほどの友だちだった。228事件のあと、怖がっていたらしい」

友人だと思っていた者が、228事件の際に反政府側にまわった。蔣介石の怒りをかうには十分すぎた。

この夫婦の息子の起こした事件については、なかなか話がきりだせない。とりわけ、父親と息子を死刑で失ったこの婦人の前で、どうしてきりだすことができるだろう。

出勤時間がどんどん遅れていくのが気が気ではなくなって、息子さんのことをきりだした。こちらが満身の勇気を奮って質問したのにたいして、湯さん夫婦はきわめて落ちついていた。

「事件が起こって問題をおこさないとわからないのです。あのときの社会には、原住民の生活には、むずかしいことがたくさんありました。原住民の子供が台北で働き、工賃ももらえず、原住民だとバカにされ、八日目に問題をおこした。この事件のあと、いろんな人たちがこの問題を研究し、その結果を政府に提出しました。そして政府も原住民の問題を注意するようになりました。この事件のあと、最低賃金制も定まりました。

息子は犠牲になって、世間に訴えたのです」

事件後七年かけて、たどりついた両親の結論だった。

〔台北にて〕

嘉義で温牧師に会ってから、阿里山のツォウ族の村を離れるまで、丸二日にも満たない短い時間であったのに、達邦から嘉義へ下るバスの中で、長いドラマでも観たあのような思いに襲われていた。とりわけ白色テロの犠牲となった人々のことは、気にかかった。

原住民を訪ねる旅を終えて台北へ戻ったとき、ある「墓参り」をすることになった。

五十年代の白色テロの犠牲者の墓が、最近、台北郊外の六張犁の共同墓地で見つかったという。作家の陳映真さんと「台湾地区政治受難者互助会」の人たちの案内で、墓地を訪ねた。発見されたとき、人の背丈より高く生い茂っていたという草は、きれいに刈り取られ、小さな墓石が土の中から顔をのぞかせていた。墓石には、この下に眠っている人の名前と、銃殺された年月日のみが刻まれている。線香をたむけた。

それぞれの墓石のかたわらには小さな旗が立ててあり、旗には番号がふられてあった。一つ一つ墓石を確かめながら、数えていったのであろう。すでに四箇所から163の墓が見つけたされたという。その後、さらに探し出された墓の数は増え、今では千を越えている。

これらの墓が発見されたいきさつを、「受難者互助会」の林書揚さんが話してくれた。林さん自身も政治犯として、34年間も投獄されていた経験をもつ。

苗栗の農村で、二人の兄弟が逮捕され、兄は銃殺された。弟は、反乱罪で十年の刑を受け、十年後に出獄した。家に帰った弟は、兄の遺体が引取られていないのを知り、父親に抗議した。父は息子を叱りつけた。一家の働き手をいっぺんに二人も失った家の苦勞がわからないか、台北まで遺体を引取りに行くだけで、一家の十カ月分の生活費がなくなるのだ、と。

このときから、弟による兄の遺体さがしがはじ

まった。陸軍墓地、共同墓地…あちこちの墓地をさがしまわった。引取り手のない政治犯の遺体は、解剖用に国防医学院にまわされると聞いて、医学院の院長を訪ねたが、そんなことは絶対ないといわれた。

最後に、日本が引揚げたあとに、市政府に移管された墓地の墓堀り人夫に話をすると、人夫は、たしか、そんな名前の墓があったという。人夫は犬を飼っていた。犬が、よく散歩する場所にあったから覚えていたのだった。

こうして三十年もさがしまわった末に、やっと、弟は兄の名前の刻まれた墓石にめぐりあえた。しかし、同姓同名かもしれないと、にわかには信じきれずにいたところ、近くから、同じ村の人々の墓も見つかって、やっと兄の墓であると確信するにいたったという。

その後、白色テロの犠牲者の墓は、続々と見つけだされた。映画『悲情城市』の監督・侯孝賢は、五十年代の白色テロをテーマとした映画を撮ることを決意したという。五十年代に逮捕され、九十年代になって出獄した男の物語で、『従前従前有 個浦島太郎』という題名だという。

墓の発見は、台湾の新聞で大きく報道された。「白色テロ」のことを、中国語では「白色恐怖」という。大きな活字で印刷された「恐怖」の字は、台湾の人々に忘れかけていた悪夢のような時代を思いおこさせた。

第二次大戦の終結によって、台湾は日本の植民地から解放されたが、台湾が復帰した祖国・中国は、国共内戦のさなかだった。やがて、その内戦は共産党の勝利を迎え、1949年10月1日、中華人民共和国が成立すると、台湾は国民党の逃げ場となった。中華民国政府も、国民党中央も、共に台湾に移り、そして我が身の安全をはかるために、赤狩りに狂奔した。

中国本土から国民党の勢力を一掃した共産党は、いまにも台湾に迫る勢いをみせていたが、1950年

6月に朝鮮戦争が勃発し、東西の対立が顕在化した。新中国の成立によって、中国大陆での足場を失ったアメリカが、アジアの足場を確保するために、台湾をとり込んだ。日本と同様、台湾もまた、アメリカの前進基地の役割を担わされることになり、国民党は台湾で、アメリカの庇護の下に置かれることになったのであった。

日本でも、閣議で公務員のレッドパージが決議されたり、自衛隊の前身の警察予備隊ができるなどして、「逆コース」という言葉がはやったほどであったが、他のアジアの国々、とりわけ国家が東西に分断された国々では、常軌を逸した血なまぐさい弾圧がくりひろげられた。

台湾では、国民党が、アメリカの反共政策に守られながら、中国大陆で共産党に敗北した鬱憤を、やっきになってはらしていた。共産党にたいする「恐れ」と「恨み」と「憎しみ」が、台湾で残酷な弾圧となってあらわれた。

林書揚さんは、当時をこう語る。

「国民党は、全ての国民を敵にまわしていた。国家の安定をはかるためには、罪なきものに罪をつくり、未然に反乱の種子をつぶそうとした。だから事件をでっちあげ、なんでもない人を逮捕し、銃殺した。本当のスパイは、恐怖心から動けなくなる。家族の人たちが泣くのもやむおえない、こういう犠牲がなければ、国全体が泣くようになる、というのが特務政治だ」

逮捕された人の数は一万にもおよび、うち四千人ぐらいが銃殺されたという。

〔機密文献によると〕

それではツォウ族の人たちが、どうして逮捕され、銃殺されたのだろうか。

四十年代の末期から五十年代にかけて、共産主義者関係の判決を集めた国家安全局の機密文献『歴年辦理匪案彙編』というのがある。自身も投獄された経験のある歴史家・李敖が入手し、出版

した。

その中から、ツォウ族の人たちにつながる部分を抜き出して、過程を追ってみた。

■「匪台湾省工作委员会反乱案」

蔡孝乾以下15名に対する判決である。ちなみに「匪」は、国民党用語で共産党、共産党員のことである。

1945年8月、中国共産党中央は、当時、延安にいた台湾出身の蔡孝乾を台湾省工作委员会書記として、台湾に派遣することを決定する。蔡はただちに延安を出発し、上海で一ヵ月の学習を経たのちに、翌年7月、台湾に潜入した。蔡の任務は、台湾の労働者、農民、革命的知識分子を結集し、人民解放軍と共に台湾解放を勝ちとることであった。そして台湾での数多くの活動の一つに、つぎのような高山族（原住民族）対策があった。

1, 高山族に対する基本政策——

- (1)高山族の自治自衛運動を起し、「民族解放」を完成させる。
- (2)高山族の自治と自衛を示し、台湾人民の「反国民党、反アメリカ帝国主義」闘争と密接に結びつける。

2, 高山族に対する具体工作

- (1)高山族の頭目、郷長、村長をオルグする。
- (2)高山族の知識分子をオルグする。とりわけ郷公所と合作社の職員、学校の教員、警察署の警官、郷民代表などに注意する。
- (3)山地で働いている平地人をオルグし、彼らを通して山地郷政機構を奪い取る。

3, 高山族工作での注意事項

- (1)宣伝工作には思想的色彩の強いものは用いず、特に秘密文献は、直接、高山族に渡して、見せてはならない。

蔡孝乾らは、1949年10月から50年2月にかけて

相次いで逮捕された。判決は、蔡が転向、ほかに陳沢民以下七名の外省籍の党員が転向、台湾省籍の二人が死刑、外省籍、台湾省籍各二名ずつ計四名が十五年の刑、台湾省籍の一人が3年の刑となっている。

転向して無罪放免となった蔡は、50年5月31日、ラジオを通して省民に懺悔したのであった。蔡は、1982年に台湾で生涯を閉じた。

■「匪山地工作委员会簡吉等反乱案」

簡吉という人については、20年余り前の思い出につながる。今は亡き弁護士古屋貞雄さんは、台湾や朝鮮が日本の植民地であった時代に、反植民地闘争をして逮捕された人々の救援に尽力された。たまたま家が近所であったために、親しくしていただき、話をする機会も多かった。その古屋さんご夫妻が、簡吉と親しかったというのである。簡吉の思い出話をしながら、邦子夫人が「簡吉さんは国民党に殺されてしまった」と、涙をぬぐわれたのを覚えている。

簡吉は、「日本時代」に台湾共産党に入党し、農民運動に従事していた。戦後、台湾に戻ってきた蔡と連絡がつき、49年10月に、蔡の指導のもとで「山地工作委员会」を設立し、書記の簡吉が北部、委員の魏如羅が中部、委員の陳頭富が南部を担当する。そして50年4月に簡吉が逮捕され、つづいて4月から7月にかけて、魏如羅と陳頭富が逮捕される。

当局の調査した「山地工作委员会の活動方式」のなかには次のようなものがものがある——山地工作委员会の組織の発展のために、すでに吸収した林瑞昌、湯守仁、高沢照などを共産党に入党させる／高砂族自治委員会（のちに蓬萊民族解放委員会に改称）を組織し、林瑞昌を首席とし、政治工作の責任者とし、湯守仁を委員とし、軍事工作を担当させる／武装根拠地を確立し、食料を蓄える。

林瑞昌と高沢照は北部角板山のタイヤル族、本来医者であった林は、当時、省議員、郷長の要職にあり、「日本時代」から角板山ばかりでなく、全タイヤル族、いや全原住民族から信頼され、尊敬されていたエリートであった。高は警察に勤務し、湯守仁は阿里山で聞いた通り、「二二八」のときに、高山部隊の隊長となって、国府軍と戦った人である。山地工作委員会のオルグの対象として、この三人に白羽の矢がたてられたのは当然であったろう。

簡吉外二十一人にたいする判決は、簡吉以下十一人が死刑、四人が不明（なにも記載されていない）、六人が一年の刑である。死刑となった十一人のなかに、林瑞昌と高沢照が入っている。

■「高山族匪諜湯守仁等反乱案」

ツォウ族の四名と、角板山のタイヤル族二名が死刑となった判決である。ほかに武義徳さんが無期懲役、ツォウ族の杜孝生、廖麗川が、十五年と十二年の刑となっている。

49年夏、湯守仁、高一生（高一成）は、山地工作委員会南部工作担当の陳顯富と知り合う。陳の要請で、省議員・林瑞昌、高沢照、簡吉などと、台北川端町の月華園で、二回にわたり集会をもち、社会情勢や共産党の山地行政治安活動について討論した。このとき陳は、高山族自治会を組織し、林瑞昌を首席とし、湯守仁に軍事責任者になるよう指示し、原住民族に共産主義を宣伝し、山地の青年を掌握し、山地工作を徹底的に展開し、共産軍の台湾上陸に備えようとした。

事実とはともかく、国府当局は、このような理由で原住民族の優秀な人たちを処刑したのであった。

■「匪台湾『蓬萊民族自救闘争青年同盟』林昭明等反乱案」

ツォウ族は一人もいないが、原住民族八名に対する判決である。いずれも知識青年で、三人が十

五年、二人が七年、三人が二年の刑を受けている。

共産主義の思想に共鳴した原住民の青年が、「台湾蓬萊民族自救闘争青年同盟」を設立し、民族の「自覚」、「自治」、「自衛」を標榜し、共産軍の台湾進攻に呼応すべく準備をしたというものである。

■「匪阿里山支部李瑞東等自首不誠案」

十三名が逮捕され、三人が死刑、三人が十二年の刑、三人が十年の刑、一人が七年の刑、一人が一年の刑、二人が感化となっている。

李瑞東らの共産党員が当局の弾圧を逃れ、阿里山の山中に隠れ、武器をたくわえ、50年3月に武装組織をつくった。共産党の上級指導者・蔡孝乾は、この武装組織はまだ不完全だとし、阿里山支部をつくるよう指示した。（実際には、このときすでに蔡孝乾は逮捕されている）

湯守仁が、山に逃げこんだ共産党員たちを支援した。方仲義（方義仲）とともに、山を出入りする共産党員の連絡をとった。共産党員を、自分が経営する醤油工場に労働者として匿い、生産に従事させたり、近くに茅屋を建て、農業に従事させたりして、生活の面倒をみた。同時に、山地警察の汪沽山（汪清山）を説得し、共産党員を匿うために、戸口総検査のときに、共産党員の国民身分証に印章を押させた。

共産党の阿里山基地から多量の武器が見つけられたのは、湯守仁、高一成ら、ツォウ族の人たちが逮捕された後であったが、武器隠匿の発覚によって、追及はきびしくなった。

【おわりに】

国家安全局の『歴年辦理匪案彙編』のなかの五つの判決によって、50年代に国府が原住民族を逮捕して銃殺した過程が多少はわかってきたが、まだかなりの疑問が残る。銃殺された人たちからは、なにも聞くことはできないが、遺族たちは、口々

に「どうして逮捕されたのか、さっぱりわからない」という。緑島帰りの武義徳さんも、「共産主義者と関係があるといれて捕まったが、あのころ、だれが共産主義者なのかかわからなかった」という。

共産党の台湾における総責任者の蔡孝乾は、取調べのなかで、こう供述している。

「われわれの対台湾高山族工作は失敗だった。平地と同じ方法を山地にもちこんだからだ。単純な考え、簡単な生活、現実的で、秘密を守ることには慣れていない——こうした彼らの特性を把握していなかった。政治意識の煽動などはとんでもなかった…」

まだ断定はできないけれど、原住民族に対する国府の弾圧には、でっちあげられた部分が多いうのだ。

では、なぜ、事件をでっちあげてまでも、原住民を弾圧しなければならなかったのか。ひとつには、共産党と関係したら、こうなるぞという見せしめのためであったろう。事実、この事件は原住民族に大きな恐怖心を植えつけ、当局の原住民政策に異議をさしはさむこともできなくさせた。だが、弾圧の対象となった二つの地区、ツォウ族の住む阿里山とタイヤル族の角板山が、「日本時代」に、日本当局から模範的とされていたことも、また気になるところである。

「日本時代」に、産業面でも、教育面でも優秀な成績をおさめていた地域は、国民党が最も不快感をいだいた「日本の奴隷化教育」の影響を受けた地域でもあった。日本語の普及率が高く、日本人と同じように日本語が話されている。そして日本語は、単に言語であるだけでなく、さまざまな日本的要素をからみつけていた。日本軍に蹂躪された中国大陆からきた国府関係者の目には、原住民族の人々が、日本人のように映ったのかもしれない。

同じように「日本時代」に模範的とされたところに霧社地方がある。しかも「二二八」のときに、

高山部隊を組織して山を下り、国府軍と交戦した。ほかの原住民が銃殺されたとき、弾圧の手が霧社にも伸びるのではないかと、覚悟した人もいたという。

51年から郷長となった高永清さんは、「日本時代」に独学で医学を学び、医者乙種免許をとった。日本当局から「先覚者」と目されていた人で、銃殺された人々とのつきあいもあった。

この人が郷長になって間もなく、霧社で、共産軍の空襲に備えての防空壕を掘っていたときに、おびたらしい白骨が発見された。1930年、日本に抗して武器をもって戦った霧社の先輩のものだった。白骨のなかには、桧の板に足の甲を釘で打ちつけられ、両手をうしろ手に針金で縛られたものもあり、抗日に起ちあがった人々への日本当局の苛酷な弾圧のさまが明らかになった。

これによって霧社の抗日武装蜂起を知った国府当局は、霧社に抗日記念碑の建立を命じた。53年、記念碑は完成した。蔣介石は自らも除幕式に参列するなどして、霧社の抗日起義に対する称賛を惜しかなかった。

53年の記念碑建立を待つように、54年に六人の原住民が処刑された。

